



Title	アリュートル語における肯否の非対称性
Author(s)	永山, ゆかり
Citation	北方言語研究, 5, 25-37
Issue Date	2015-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58325
Type	departmental bulletin paper
File Information	04Nagayama_tokushu.pdf



[特集 否定構造]

アリュートル語における肯否の非対称性

永山 ゆかり

(北海道大学)

1. はじめに

本稿¹では、アリュートル語（北東シベリア、チュクチ・カムチャッカ語族）の否定形態素の豊富さとそれぞれの具体例について、肯否の非対称性に注目しながら見てゆく。

アリュートル語の否定文は肯定文との対比において構造上の非対称性を示す場合と、文法範疇上の非対称性を示す場合とがある。否定構造の大きな特徴としては、否定形態素が豊富であること、否定小詞と否定接周辞により二重に標示される二重標示型否定を持つこと、現実・非現実の違いや法が否定形態素の現れ方に反映されるという点があげられる。

以下、第2節ではアリュートル語の否定構造について概観し、第3節では接周辞型の否定文、第4節では定動詞型の否定文、第5節では接周辞型と定動詞型の両方がもちいられる否定文、第6節では否定形態素を用いない否定表現についてまとめ、アリュートル語のさまざまな否定形態素の否定形態素の選択において、現実・非現実や法が密接に関わることを示す。

2. 否定構造の概要

アリュートル語の否定形態素は多様であり、動詞述語文に用いられるものとして3種類の小詞 *allə*, *kətvəl* (否定命令), *qəttəmmə* (否定未来)、3種類の接周辞 *(a)l...-ka*, *nuŋ...-(t)a*, *təŋgi...-(t)a* がある。否定形態素の現われ方には、(A)否定小詞+否定接周辞による二重標示（以下、接周辞型）および(B)否定小詞+動詞希求法あるいは仮定法（以下、定動詞型）の2種類がある。なお、この言語では語順は比較的自由であるといわれているが、否定構造においては以下のような語順となり、否定小詞は必ず動詞より前に現れる。ただし、否定小詞と動詞の間にはほかの要素が現れうる(6b)。

(A) 接周辞型

否定小詞	+	否定接周辞-動詞語幹-否定接周辞	+	(補助動詞語幹-屈折接辞)
<i>allə</i>		<i>a-rəlqiv-ka</i>		<i>(t-it-ə-k)</i>
NEG		NEG-入る-NEG		1SG.S-AUX.VI-E-1SG.S
				「私は入らなかった」

¹ 本稿は科学研究費補助金基盤研究(B)「北東ユーラシア少数言語の電子アーカイブ環境構築とドキュメンテーション研究」(代表:長崎郁)および基盤研究(C)「消滅の危機に瀕する古アジア諸語の再活性化のための辞書編纂と語彙データベース構築」(代表:永山ゆかり)による調査の成果である。資料に用いたのは筆者が現地調査で収集したテキストおよび公開されている資料集等のテキストである。

(B) 定動詞型

否定小詞 + 動詞語幹-屈折接辞

qətam̩mə *mur-u* *mən-ralqiv-la* 「私たちは入らない」
NEG.FUT 私たち-Abs.PL OPT.1NSG.S-入る-PLUR

Miestamo (2005, 2007)は否定構造を大きく 2 種類に分類し、否定標示が加わることを除き肯定文と変わらないものを対称的否定 (symmetric negation)、否定標示のほかにも肯定文との違いがあるものを非対称的否定 (asymmetric negation)と呼んでいる。構造上、アリュートル語の接周辞型否定は肯定と非対称的であり、定動詞型は対称的である。

Payne (1985)は否定標識の種類を①形態的(接辞による)否定、②否定小詞、③否定動詞、④否定名詞の 4 つのタイプに分類しているが、アリュートル語の二重標示型否定では①と②が複合的に用いられる。否定標識の二重標示が多く言語に見られることは Miestamo (2007) が指摘している。

否定を表わす様々な形態素は現実・非現実 (realis/irrealis)、法、時制によって使い分けられる²。それぞれの形態素と動詞がとる形式の組み合わせは次のようにまとめられる。

(1) 現実

- a. *allə* + *a-Verb-ka* (+ *AUX-IPFV/PFV* または *AUX-RES*) (現在・過去の否定)
- b. *allə* + *a-Verb-kə-lʔ* (否定分詞、存在の否定)

(2) 非現実

- a. *a-Verb-ka* (+ *AUX-SUBJ*) , *nun-Verb-(t)a*, *təm̩ji-Verb-(t)a* (従属節の否定)
- b. *qətam̩mə* + *Verb-OPT* または *Verb-SUBJ* (否定未来)
- c. *kətvəl* + *a-Verb-ka* (+ *AUX-IMP* または *AUX-OPT*) (否定命令)
- d. *kətvəl* + *nun-Verb-(t)a* (+ *AUX-OPT*) (否定命令)
- e. *kətvəl* + *Verb-OPT* (否定命令)

否定構造で用いられる否定小詞 *allə* および否定未来を表わす *qətam̩mə* は動詞を含む yes/no 疑問文の答えとしても用いられる。

- (3)a. *matka* *jisusav-i?* 「わかったか？」
疑問 理解する-2SG.S.PFV
- b. *allə* 「いいえ」
NEG

² アリュートル語と同系のチュクチ語において、さまざまな否定形態素が現実・非現実、法、時制によって使い分けられることは Dunn (1999)および Pupynina (2013)らが指摘している。

- (4)a. *matka ta-saju-ŋi?* 「お茶を飲むか？」
 疑問 FUT.2SG.S-お茶を飲む-FUT.S
- b. *pasa qatamma* 「今は飲まない」
 しばらく NEG.FUT

また、上記以外にも疑問詞 *taq-*「何」、形容詞 *kt-*「固い、難しい」、不可能を表わす動詞 *pakav-*「～できない」³などをもちいて否定を表わすことができる。これらの用法については5節および6節で述べる。

3. 接周辞型

3.1. 現在・過去の否定

現在・過去(非未来)の否定は、否定小詞 *alla* と動詞語幹に付加される否定接周辞 *(a)-...-ka*⁴により二重に標示される。動詞語幹に否定接周辞が付加されると、肯定文では必須となる文法カテゴリーを示す屈折接辞を動詞語幹に付加することができない。そのため文法カテゴリーは補助動詞に付加された屈折接辞により表わす。つまり肯定文とは構造的に非対称的である。Miestamo (2005: 71) は非対称的否定のうち、このように動詞が finiteness を失い、新たに付加された補助動詞等によってこれを補うものを「A/Fin 型非対称」(A/Fin assymetry)と呼んでいる。補助動詞は自他で異なる語幹(自動詞は *it-*、他動詞は *-nt-*)を用いるが、文脈から文法関係が明らかな場合は省略されることもある。

- (5)a. 肯定文／他動詞
t-a-yita-yət
 1SG.A-E-見る-2SG.P
 「私はおまえを見た」
- b. 否定文／他動詞
alla a-yita-ka t-a-nt-a-yət
 NEG NEG-見る-NEG 1SG.A-E-AUX.VT-E-2SG.P
 「私はお前を見なかった」
- (6)a. 肯定文／自動詞
t-a-jat-a-k
 1SG.S-E-来る-1SG.S.PFV
 「私は来た」

³ アリュートル語の動詞は語幹のみを単独でもちいることはできず、必ず不定形の接尾辞をとる。しかし語幹が語頭に現れる場合と、語中にあらわれる場合で異形態を用いることもあるため、本稿では動詞はすべて語幹形で示す。そのほかの品詞についても同様である。

⁴ 母音で始まる語幹の前では接頭辞 *a-*が脱落する。

b. 否定文／自動詞

alla=qi *yammə* *a-jat-ka* *qor* *nəkita* *t-it-ə-k*
 NEG=EMP 1SG.ABS NEG-来る-NEG ここへ 夜に 1SG.S-AUX.VI-E-1SG.S.PFV
 「私は夜ここへ来なかったんだってば」

(7)a. 肯定文（結果相）／他動詞

ɣənvək *qura-ɣa* *ɣa-nm-ə-lin* *papa-nak*
 たくさん 家畜トナカイ-ABS.SG RES-殺す-E-RES.3SG.P お父さん-ERG.SG
 「お父さんはたくさん家畜トナカイを殺した」

b. 否定文（結果相）／他動詞

ɣavəsɣ-ə-n *misʔasʔat-ə-lʔ-ə-n* *alʔ* *a-nm-ə-ka*
 女-E-ABS.SG 美しい-E-PROP-E-ABS.SG NEG NEG-殺す-E-NEG

ɣa-nt-ə-l *ɣavhan-u* *ɣ-akmil-lin*
 RES-AUX.VT-E-RES.3SG.P 妻-ESS RES-とる-E-RES.3SG.P
 「美しい女は殺さなかった。妻にした」

以上の例に見るように、小詞 *alla* は直説法完了・不完了および結果相で用いられるが、直説法未来、希求法、仮定法、命令法では用いられない。つまり現実 (realis) の否定に用いられる形式である。

なお、否定文において補助動詞として用いられる動詞語幹には自立的な用法もある。自動詞 *it-* は「ある、いる」など存在を表わし、テキストや会話において高い頻度で用いられる。他動詞 *-nt-* は自立的な用法の頻度は低いものの、「する」などの意味を表わす。他動詞 *-nt-* の最初の子音は語頭で *t* となるため、不定形は *tətəkki* となる。それぞれの動詞の自立的な用法の例を以下に示す。

(8) 自動詞 *it-* 「ある、いる」

əŋe *ɣəty-ə-nʲaqu* *ənki* *it-ə-tkə*
 ひどく 湖-E-AUG(3SG.ABS) そこに ある-E-IPFV(3SG.S)
 「そこにとても大きな湖があった」

(9) 他動詞 *-nt-* 「する」

ənkəti *na-nt-ə-tkə-na* *ɣanək* *əpa-kki*
 このように INV-する-E-IPFV-3PL.P そこで.LOC スープ-LOC
 「そしてスープの中で（石を）このようにする」

3.2. 否定分詞

否定分詞は接周辞(*a-*)...*-ka* の後に分詞化の接尾辞-*lʔ*を付加することにより形成される⁶。

⁵ 否定小詞 *alla* の短縮形として、しばしば *al* が用いられる。

⁶ 同じ接周辞が名詞語幹に付加された場合、「Nを持たないもの」という所有の否定を表わす。詳しくは3.3で述べる。

この形式は絶対格の接尾辞-*n*⁷または接尾辞-*ina*⁸をとり、名詞項として定動詞の主語・目的語の位置にたつほか、名詞述語としても用いられる。以下の例(10)では否定分詞「まだ起き上がらないやつ」が絶対格単数の接尾辞をとり、他動詞「激しく殴る」の直接目的語となっている。次の(11)では否定分詞が自動詞「出かける」の主語となっている。次の(12)は名詞述語文で、否定分詞「死んでいないもの」がその前の指示詞「これら」の述語となり、絶対格双数で一致している。

- (10) *jappə a-lqut-kə-lʔ-ə-n⁹ uviki-ta*
 まだ NEG-起き上がる-NEG-PART-E-ABS.SG 体-INST
mal-evəkl-ə-tkə-nin...
 よい-殴る-E-IPFV-3SG.A>3SG.P
 「まだ起き上がらないやつに体当たりした」(Kilpalin 1993: 102)
- (11) *...jaqe al a-tʃ-ə-kə-lʔ-in awwav-i*
 ...だって NEG NEG-E-病む-NEG-PART-3SG.PRED 出かける-3SG.S.PFV
 「だって病気じゃないものが出かけたのに (=出かけたときは病気じゃなかったのに)」¹⁰
- (12) *yemat wuttaq-ti allə a-viʃ-ə-kə-lʔ-inat*
 たぶん これら-ABS.DU NEG NEG-死ぬ-E-NEG-PART-3DU.PRED
 「たぶんこいつら (二人) は死んでいない」(Kibrik et al. 2004: 103)

3.3. 所有・存在の否定

所有・存在の否定を表わすのに最も頻繁に用いられるのは名詞語幹に接周辞 *a-...-kə-lʔ-*「～がない」を付加した形式である¹¹。3.2 節で述べた否定分詞と同様に、3 人称では接尾辞 *-in/-inat/-inaw* をともなうことが多く、1 人称および2 人称ではそれぞれの人称・数に応じた述語形をとる。

⁷ 単数で接尾辞-*n*、双数では接尾辞-*t*、複数では接尾辞-*w* をもちいる。

⁸ 接尾辞-*ina* は名詞語幹に付加されて所有形を形成する接尾辞と同形である。数に従って変化し、末尾の母音が脱落した-*in* は3 人称単数を、絶対格双数の接尾辞をとともなう-*ina-t* は3 人称双数を、同じく複数の接尾辞を伴う-*ina-wwi* は3 人称複数を表わす。

⁹ ここで否定小詞 *allə* が現れない理由はよくわからない。否定分詞の前に小詞 *jappə* 「まだ」が現れているためかもしれない。ただしテキスト中には小詞 *jappə* の後に否定形が続く場合、否定小詞 *allə* をともなう例と、ともなわない例とが両方現れる。

¹⁰ これはフォークロアの一節で、「病気ではないもの」は、発話者の「娘」を暗示している。ここでは否定分詞「病気ではないもの」が「娘」を指す名詞句 (=主語) であると解釈しているが、「娘」が省略されていると考えることもできるかもしれない。なお、ここで「述語形」としている形式は、名詞述語文の述語として用いられることが多いが、動詞の項となることもある。しかしこの形式の機能にはまだ不明な部分も多く、今後の調査で明らかにする必要がある。

¹¹ これは、アリュートル語で存在を表わす表現のうち、もっとも頻繁に用いられるのが名詞語幹に所有・存在を表わす接辞 (接尾辞-*lʔ*あるいは接周辞 *ya-...-lin*) を付加した形式であることと関連があるだろう。接尾辞-*lʔ*は名詞語幹に付加されて *propriative* 「～を持つもの」を形成する。所有・存在を表わす接辞については Nagayama (2014) を参照されたい。

- (13) *yəmmə qətəmmə ʔanək m-ə-tkiv-ə-k*
私.ABS NEG.FUT そこ.LOC OPT.1SG.S-E-泊まる-E-1SG.S
məri al a-pasi-kə-l2-in rara-ʔa
なぜなら NEG NEG-ストーブ-NEG-PROP-3SG.PRED 家-ABS.SG
「私はそこでは泊まらない。(あの)家はストーブがないから」
- (14) *al məri muru a-miməl-kə-l2-ə-muru*
NEG なぜなら 私たち.PL NEG-水-NEG-PROP-E-1PL.PRED
「だって私たちは水がないんだよ」

所有・存在の否定はこのほかにも、否定小詞 *allə* (しばしば疑問詞 *tinya* 「何」をとともなう) と自動詞 *it-* 「いる／ある」に否定接周辞(*a-*)...-*ka* を付加することでも表わすこともできるが、上にあげた否定接周辞による表現と比べるとやや頻度が低いようである。

- (15) *muryina allə tinya ləyi-ratamra-w it-ka*
私たちの.POSS>3PL NEG 何.ABS.SG 本当の-毛皮テント-ABS.PL ある-NEG
「私たちは本当の毛皮テントはなかった」

3.4. 従属節中の否定

現在・過去の否定で用いられる否定接周辞(*a-*)...-*ka* は小詞 *allə* をともなわずに従属節内に現れた場合、「もし～しなければ」という条件を表わす。

従属節の始めに小詞 *ʔavaq* 「もし」をとともなうこともあるが、義務的ではない。(16)はこれから起こる行為についての否定、(17)は過去の行為についての否定である。なお、(17)では動詞否定形 *it-ka* 「いない」の後に続く補助動詞が仮定法の屈折接辞をとっている。

- (16) *yəttə a-jat-ka qətəm taʔ-ə-lqət-ə-k*
おまえ.ABS NEG-来る-NEG NEG.FUT SUBJ.1SG.S-E-行く-E-1SG.S
「おまえが来ないなら、私は行かない」
- (17) *sasusaŋawət it-ka nəʔ-it-ə-n, tinga asgi*
PSN.ABS.SG いる-NEG SUBJ.3SG-AUX.VI-E-SUBJ.3SG 何.ABS.SG 今
taq+yəmmə m-it-ə-k, ta-viʕ-ə-k ənkəjap
何+私.ABS OPT.1SG.S-いる-E-1SG SUBJ.1SG.S-死ぬ-E-1SG.S ずっと前に
「もしも S がいなければ、私は存在しなかつただろう。ずっと前に死んでいただろう。」

従属節中で用いられる否定接周辞として(*a-*)...-*ka* のほかに *nuŋ-...-(t)a* および *təmyi-...-(t)a* がある。接周辞 *nuŋ-...-(t)a* は従属節中では「～しないように」という否定目的をあらわす。この接周辞は否定命令の小詞とともに用いられることもある(5.1 節参照)。(18)では動詞否定形 *nuŋ-yətʔav-a* 「飢えないように」の後に続く補助動詞が仮定法の屈折接辞を、(19)では動詞否定形 *nuŋ-quqlu-ta* 「穴をあけないように」の後に続く補助動詞が直説法の屈折接辞を

とっている。Kibrik et al. (2004: 630)および Maltseva (2006: 30)¹²はこの接周辞が付加された形式を否定副動詞としている。目的の小詞 *qinaq* をともなうこともある。

- (18) *qura-ŋa* *ya-nm-ə-lin* *papa-nak* *inulqəl-u* (...)
 家畜トナカイ-ABS.SG RES-殺す-E-RES.3SG.P お父さん-ERG 道中の食料-ESS

[/top] *winv-ə-k* *nuy-ŋətʔav-a* *nəʔ-it-ə-lqiv*
 ために 道-E-LOC NEG-飢える-NEG SUBJ.3S-AUX.VI-E-INCH

「(彼らが) 道中でお腹がすかないように、道中の食料としてお父さんはトナカイを一頭殺した」

- (19) *[i]* *rəwi-ta* *n-inanp-ə-tkə-na* *qinaq* *qapara-ta*
 そして 小枝-INS INV-ふさぐ-E-IPFV-3PL.P PURP クズリ-ERG

nuy-quqlu-ta *na-nt-ə-tkə*
 NEG-穴をあける-NEG INV-AUX.VT-E-IPFV

「そしてクズリが穴をあけないように、小枝でそれをふさぐ」

否定接周辞 *təmŋi-...-(t)a* は従属節中にだけ現れる。この接周辞をともなう用例はテキスト中 8 例あり、上述の接周辞 *nuy-...-(t)a* と同様に小詞 *qinaq* をともなっている例もある¹³。

- (20) *ʃopta* *tinya* *n-ə-misʔa-qin* *ŋanək* *ya-ju-lin* (...)
 すべて 何.ABS.SG ADJ-E-美しい-ADJ.3SG そこに RES-入れる-RES.3SG.P

ʃaqalʔ-a *təmŋi-ʔakmit-a* *ənŋina*
 敵-ERG NEG-とる-NEG それら>3PL.ABS

「敵にとられないように、美しいものはすべてそこに入れた」

4. 定動詞型の否定

4.1. 否定未来

小詞 *qətammə* を用いる構造は否定未来を表わす。否定形態素の現れ方は定動詞型で、動詞は定動詞希求法あるいは仮定法をとる。以下の例で(21a)は動詞が希求法の否定未来、(22a)は動詞が仮定法の否定未来の文であり、(21b, c)と(22b)はそれぞれに対応する肯定文の例である。例(21a)の小詞 *qətammə*+定動詞希求法を用いた否定文に対応する肯定文では、動詞が希求法で現れるもの(21b)と、直説法未来で現れるもの(21c)があるが、否定文において両者の対立は解消されている。つまり肯定文において区別される法範疇が、(21a)の否定文においては区別されていない。

¹² それぞれの原語は *negative converb*, *otritsatelnoe deeprichastie* である。

¹³ ただし、補助動詞が後続する例は 8 例中 1 例も見られなかった。文脈から主語と目的語が明らかなために省略されているのかどうか、今後の調査で明らかにする必要がある。

- (21)a. *qatammə muru mən-ralqiv-la*
 NEG.FUT 私たち.ABS.PL OPT.1NSG.S-入る-PLUR
 「私たちは（屋内へ）入らない」（否定未来）
- b. *mən-ralqiv-la*
 OPT.1NSG.S-入る-PLUR
 「（屋内へ）入ろう」（希求法）
- c. *mət-ta-ralqiv-la-ŋ*
 1NSG.S-FUT-入る-PLUR-FUT
 「私たちは（屋内へ）入る」（直説法未来）
- (22)a. *yəmmə qatammə təʔ-awwaw-ə-k*
 私.ABS NEG.FUT SUBJ.1SG.S-行く-E-1SG.S
 「私たちは行かないだろう」（Kibrik et al. 2004: 261）（否定未来）
- b. *inməʔak qun nuta-ŋ təʔ-ə-lqət-ə-k usa*
 本当に さあ ツンドラ-DAT SUBJ.1SG.S-E-行く-E-1SG.S さあ
 「まったくだ。ではツンドラへ出かけようかな」（Kibrik et al. 2004: 37）（仮定法）

5 接周辞・定動詞型の否定

5.1. 小詞 *kətvəl* による否定命令

小詞 *kətvəl* は「～してはならない」という否定命令を表わす。接周辞型と定動詞型の両方のタイプが用いられる。

接周辞型の否定命令は現在・過去の否定とは否定小詞の種類だけが違っており、動詞が否定接周辞(*a*)-...-*ka* をとること、補助動詞が義務的ではないという点はすべて現在・過去の否定と同様である。

なお、2人称に対する命令は肯定文においては命令法(23)と希求法(24)で表わされ、どちらの形式でも意味に大きな違いはないようだが、詳細は明らかではない。

- (23) 命令（命令法）
ya-ralqiv-a 「入れ」
 IMP-入る-IMP
- (24) 命令（希求法）
q-ə-ralqiv-yi 「入れ」
 OPT.2S-E-入る-2SG.S
- (25) 否定命令（接周辞型）
kətvəl a-ralqiv-ka 「入るな」
 PROH NEG-入る-NEG

接周辞型の否定命令文には命令法または希求法の補助動詞を付加することができる。

(26) 否定命令+補助動詞（命令法）

kətvəl *ʕəlu* *a-la-ka* *y-it-ə-lqiv-a*
 PROH 日中 NEG-行く-NEG IMP-AUX.VI-E-INCH-IMP
 「日中に歩いてはいけない（夜に行け）」

(27) 否定命令+補助動詞（希求法）

kətvəl ... *a-ta-nm-ə-ŋ-ka* *q-ə-nt-ə-tkəni-yan*
 PROH NEG-DESID-殺す-E-DESID-NEG OPT.2A-E-AUX.VT-E-IPFV-2SG.A>3SG.P
ənŋin *un'ʊn'u*
 その>3SG 子供(ABS.SG)
 「その子供を殺そうとしてはいけない」

定動詞型の否定命令では小詞 *kətvəl* に後続する定動詞が希求法の屈折接辞をとる。この場合、否定文は肯定文に対し構造的に対称をなす。次の例で、(28)は否定の小詞と定動詞希求法により「残るな」という否定命令を表わすが、否定の小詞がなければ「残れ」という命令文(29)となる。

(28) *kətvəl=qi* *yəttə* *q-ə-pilat-yi* 「お前は（ここに）残るな」
 禁止=EMP 2SG.ABS OPT.2-E-残る-2SG.S

(29) *q-ə-pilat-yi* 「お前は（ここに）残れ」
 OPT.2-E-残る-2SG.S

また、小詞 *kətvəl* を含む文で接周辞 *a...ka* のかわりに *nuy...-a* を用いるものがテキスト中 2 例だけ確認されている。(30)の下線部のように、補助動詞が希求法の接辞をともなっており、人称・数などが文脈から明らかな場合には補助動詞は省略されうる(31)。

(30) *kətvəl* *nuy-ə-nm-a* *mən-ə-nt-ə-nat*
 PROH NEG-E-殺す-NEG OPT.1NSG.S-E-AUX.VT-E-3DU.P
 「私たちは彼らを殺してはならない」 (Kibrik et al. 2004: 102)

(31) *kətvəl* *maŋkət* *nuy-ə-lləqtat-a*
 PROH どこへ NEG-E-連れていく-NEG
 「（私たちを）どこへも／どこかへ連れて行かないで！」

5.2. 小詞 *inias* による否定命令

小詞 *inias* 「十分だ」を用いて否定命令を表わすことができる。小詞 *inias* による否定もまた、接周辞型 (*a*-動詞語幹-*ka*) および定動詞型（定動詞希求法）の両方のタイプで用いられる。

(32) 否定命令（接周辞型）

a-mal-ka in'ias a-tirgəviʃ-ə-la-ka
 STA-良い-STA¹⁴ 十分だ NEG-泣きじゃくる-E-PLUR-NEG
 「いいから、もう泣くんじゃないよ」

(33) 否定命令（定動詞型）

tok qutkən'n'iaqu in'ias q-inass-ə-yi ... pəsa
 さあ PSN 十分だ OPT.2S-邪魔する-E-2SG.S しばらく
m-ə-jəlqat-ə-tkə
 OPT.1SG.S-E-眠る-E-IPFV
 「さあクトクンニャク、邪魔をするな、私はしばらく眠るのだ」

6. その他の否定表現

否定詞を伴わない否定表現として、疑問詞 *taq-*「何」、形容詞 *kt-*「固い、難しい」、不可能を表わす動詞 *pəkav-*「～できない」を用いるものがある。

6.1. 疑問詞による存在の否定

名詞語幹の前に疑問詞語幹 *taq-*「何」を付加することにより、「まったく N がない」という意味を表わす。

- (34) *ɣonək rəlti-ə-tkə ʃətʃ-ə-naly-ə-n, ana taq-ʃətʃ-ə-n,*
 そこに 横たわる-E-IPFV(3SG.S) 犬-E-毛皮-E-ABS.SG たぶん 何-犬-E-ABS.SG
ana ɣa-nm-ə-lin
 たぶん RES-殺す-E-RES.3SG.P
 「そこには犬の毛皮（だけ）が転がっていて、犬の影も形もなかった。たぶん（肉をとるために）殺されたのだろう」

上述の存在の否定を表わす *(a-)...-ka-lə-*「～がない」は人称代名詞や固有名詞には付加されないのに対し、疑問詞は人称代名詞や固有名詞にも付加されうる。次の(35)および(36)のように、疑問詞が付加された名詞に補助動詞が後続する場合、動詞は希求法をとる。なお、(35)では否定小詞 *allə* なしに疑問詞だけで存在の否定を表わしているが、これは「私は存在しなかっただろう」という反現実を示しているためであろう。(36)のように現実を表わす場合には通常は否定小詞をとる。

¹⁴ 接周辞 *(a-)...-ka* は動詞語幹および名詞語幹に付加された場合は否定を表わすが、形容詞語幹に付加された場合には状態を表わし、否定の意味はもたない。Kibrik et al. (2004)では両者を一つの形態素とみなし、状態を表わす接周辞であるとしている。しかし、この接周辞は否定小詞を伴わない場合にも否定をあらわしうるので、共時的には別の形態素であると考えてよいだろう。

- (35) *sasusanawət it-ka nəʔ-it-ə-n, tinya asyi*
 PSN.ABS.SG いる-NEG SUBJ.3SG-AUX.VI-E-SUBJ.3SG 何.ABS.SG 今
taq-γammə m-it-ə-k, ta-viʃ-ə-k ənkajap (=17)
 何-私.ABS OPT.1SG.S-いる-E-1SG.S SUBJ.1SG.S-死ぬ-E-1SG.S ずっと前に
 「もしも S がいなければ、私は存在しなかっただろう。ずっと前に死んでいただろう。」
- (36) *jəqmitiv ya-kjav-lin allə tin¹⁵ taq-amamqutikalʔ-ə-n*
 朝 RES-目覚める-RES.3SG.S NEG 何.ABS.SG 何-PSN-E-ABS.SG
n-it-ə-n
 OPT.3SG.S-いる-E-3SG.S
 「朝（妻が）目覚めると、Aは影も形もなかった」

6.2. 不可能性の表現

形容詞 *kt-*「固い、難しい」、動詞 *pəkav-*「～できない」の後に動詞を伴い、動詞で表わされた行為の実現が不可能であることを示す。形容詞 *kt-*「固い」を用いた表現では動詞は希求法のほかに不定形をとることもある。それぞれの意味の違いはまだ明らかではない。

- (37) *a-kt-ə-ka m-ə-pilat-ə-k*
 STA-固い-E-STA OPT.1SG.S-E-残る-E-1SG.S
 「私は（ここに）残ることはできない」
- (38) *yutku van a-kt-ə-ka teqat-ə-k*
 ここで EMPH STA-固い-E-STA 漁をする-E-INF
 「ここでは漁をすることができない」

動詞 *pəkav-*「～できない」を用いた表現では、動詞は不定形をとる。これに対応する肯定文は平叙文の「母は（息子を）止めた」であり、「～できる」に相当する動詞はない。

- (39) *pəkav-nin əllaʔ-a viriŋ-ki*
 不可能である-3SG.A>3SG.P 母-ERG 止める-INF
 「母は（息子を）止められなかった」

7. まとめ

以上、アリュートル語の否定構造について論じてきた。アリュートル語では 3 種の否定小詞と 3 種の否定接周辞をさまざまに組み合わせて否定を表わす。否定構造は否定形態素の現れ方により、接周辞型と定動詞型とに大きく分けることができるが、このどちらにもあてはまる両用型もあり、全体として複雑な様相を呈している。

本稿で明らかにしたのは以下の点である。

¹⁵ 疑問詞 *tinya*「何」は否定小詞 *allə* に後続する場合、しばしば *tin* という短縮形で現れる。

- (40) a. 現実・非現実、時制、法が複合的に関与し、さまざまな否定形態素を使い分ける。
 b. 否定形態素の現れ方により接周辞型（否定小詞＋否定接周辞）、定動詞型（否定小詞＋定動詞）、接周辞・定動詞両用型の3タイプに分けられる。
 c. 接周辞型の否定は肯定文に対し構造的に非対称であり、現在・過去の否定、従属節の否定、否定命令に用いられる。
 d. 定動詞型の否定は肯定文と構造的に対称であり、否定未来に用いられる。
 e. 否定命令は接周辞型と定動詞型の両方の標示が可能である。
 f. 接周辞型否定は現実の否定に、定動詞型の否定は非現実の否定に用いられる。
 g. 否定接周辞の付加により動詞はfinitenessを失うが、補助動詞によって文法カテゴリーを表わすことが可能である。
 h. 否定未来においては直説法と希求法の対立が解消される。

略号一覧

A agent; ABS absolutive; AUX auxiliary verb; EMP emphasis; DAT dative; DESID desiderative; E epenthesis; ERG ergative; ESS essive; FUT future; IMP imperative; INCH inchoative; IND indicative; INF infinitive; INS instrumental case; INV inverse; IPFV imperfective; LOC locative; NSG non-singular number; OPT optative; P patient; PFV perfective; PL plural number; PLUR pluralizer; PSN person name; PROH prohibitive; PROP proprietive; PURP purposive; S intransitive subject; SG singular number; SUBJ subjunctive; STA stative; RES resultative; VI intransitive verb; VT transitive verb; 1 first person; 2 second person; 3 third person; [] Russian words, - affix-stem boundaries; + stem-stem boundaries.

参考文献

- Dunn, Michael. 1999. *A Grammar of Chukchi*. Ph.D. dissertation. Australian National University. (Unpublished)
- Kibrik, Alexander et al. 2004. *Language and Folklore of the Alutor people* (ELPR publication series A-042). Osaka Gakuin University.
- Maltseva, Alla. 2006. Otritsatel'no-tselevye konstruktsii v chukotsko-koriakskikh iazykakh. *Gumanitarnye nauki Sibiri No.4*: 28-35.
- Miestamo, Matti. 2005. *Standard Negation: The Negation of Declarative Verbal Main Clauses in a Typological Perspective*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Miestamo, Matti. 2007. Negation – An overview of typological research. *Language and Linguistics Compass* 1/5: 552-570.
- Nagayama, Yukari. 2014. Two Proprietary Forms in Alutor. *Tomsk Journal of Linguistics and Anthropology No.1*: 43-55.
- Pupynina, Maria. 2013. *Sposoby vyrazheniia otritsaniia v chukotkom iazyke*. Ph.D. dissertation, Institute of Linguistic Research, Russian Academy of Science. (Unpublished)

Asymmetric Negation in Alutor

Yukari NAGAYAMA
(Hokkaido University)

This paper gives an overview of negative constructions in Alutor (a Chukchi-Kamchatkan language). Alutor has a rich set of morphemes used in verbal negation: three negative particles (*allə*, *kətvəl*, and *qətəmmə*) and three negative circumfixes (*a-...-ka*, *nuŋ-...-(t)a*, and *təmŋi-...-(t)a*). Negative constructions are broadly divided into two types:

- (i) Circumfix-type: negative particle + a verb stem with negative circumfix
- (ii) Finite-type: negative particle + finite verb in the optative or subjunctive mood

The first type is mainly used for negation of realis (non-future), and the second type for negation of irrealis (future). In addition to these, there is a third option of using both types of negative construction. Negative commands (or prohibition) are formed in this way.

The circumfix-type negation is constructionally asymmetric: a verb stem is marked with a negative circumfix, and inflectional affixes obligatorily attached to a verb stem in the affirmative are attached to the auxiliary verb stem. The finite-type negation is constructionally symmetric, but paradigmatically asymmetric: a verb stem takes inflectional affixes in the optative or subjunctive mood without any semantic difference, whereas those moods represent different semantic functions in the affirmative.

(ながやま・ゆかり nagayama@let.hokudai.ac.jp)